

華氏911

2004(平成16)年9月6日鑑賞(ナビオ TOHO ブレックス)

★★★★



監督・製作・脚本＝マイケル・ムーア（ギャガ・コミュニケーションズ、博報堂 DY メディアパートナーズ、日本ヘラルド映画共同配給／2004年アメリカ映画／122分）

第3章

スクリーンの彼方に世界が見える

……ブッシュ大統領 VS. マイケル・ムーア監督の「対決」は、この作品がカンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞したことによって、さらにヒートアップし、全米を「華氏911論争」に巻き込んだ。しかし、「政治オンチ」の多い日本では、話題はもうひとつ……。同映画祭で最優秀男優賞を獲得した柳楽優弥君主演の『誰も知らない (Nobody knows)』（04年）の方が大人気！ 11月2日のアメリカ大統領選挙の行方は……？

全米大ヒット、話題騒然のはずだが……？

『華氏911』は、一般公開に先駆けて、2004年6月23日ニューヨークの2つの映画館で先行上映されるや長蛇の列を生み出し話題を呼んだ。そして、6月25日全米の50州868館で公開されるや、驚異的な人気を集めて興行的にも大成功をおさめるとともに、アメリカのメディアでは「華氏911論争」が全米を席卷した。

その論争の中で、「事実か歪曲か」「ジャーナリズムか個人のエゴか」「これがドキュメンタリーと呼べるのか」等の論点が次々と加熱し、公開劇場も公開1週間で1725館に倍増したとのこと。そして、2004年8月14日、ついに日本の恵比寿ガーデンシネマで独占先行ロードショーが行われ、話題を呼んだことは記憶に新しく、その1週間後の8月21日から一般公開された。

しかし私の印象は、公開劇場は意外と少ないし、「連日満員御礼」と書かれていた当初の新聞報道ほど爆発的な人気を呼んでいないのでは、というものだった。これは同じカンヌ映画祭で、14歳の柳楽優弥君が主演男優賞を獲得した是枝裕和監督の『誰も知らない (Nobody knows)』（04年）が、当初1、2館だけの上映

だったものの、大人気を呼んだため、拡大ロードショーに切りかえられたことと対照的なもの。私は公開から2週間以上遅れて、9月6日にこの『華氏911』を観たが、意外にも劇場はガラガラ状態。あの盛り上がりは一体何だったのだろうか？と思わずうなってしまった。

政治と映画、そしてカンヌ映画祭

2004年5月開催された第57回カンヌ国際映画祭の審査委員長は、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』（03年）、『キル・ビル～KILL BILL～Vol.2 ザ・ラブ・ストーリー』（04年）のクエンティン・タランティーノ監督。『誰も知らない（Nobody knows）』が日本で大ヒットしていることは前述のとおりだが、最高賞（パルムドール）を獲得したのが、この『華氏911』。

タランティーノ監督は、「政治は受賞に何の関係もない。単に映画として面白かったから君に賞を贈ったんだ」と語ったとされている。私もきっとそうだと思うが、そういうことが本当に実行できるのは実にすばらしいこと。

なぜなら、いくら「映画（芸術）は政治とは関係がなく自由だ」という原理原則論を述べても、政治（権力）が自分に都合の悪い映画（芸術）を排除し、白眼視してきたことはれっきとした歴史的な事実。映画（芸術）の世界における「表現の自由と政治権力との闘い」は、永遠のテーマなのだ。

ところが、第57回カンヌ国際映画祭では、アメリカ大統領選挙がヒートアップしている真っ最中に現職大統領であるとともに次期大統領候補のジョージ・W・ブッシュを、これほどまでにこきおろしたドキュメント映画がパルムドールを獲得したというのは、ホントにすごいニュース。

「過激な作品にはかかわりたくない」というマイケル・アイズナー（ウォルト・ディズニー社 CEO）の発言が、日本人的な目でみればもっとも標準的な発言だろう。しかしパンフレットには、「ここまで極悪きわまる腐敗政権が描かれている」（ショーン・ペン 米国監督、俳優）、「ムーアを称えて!!」（ドリュー・バリモア 米国女優）、「華氏911、最高!」（マドンナ 米歌手）と書かれているように、アメリカでは、トップ俳優等であっても、自分の政治的立場や主張を明らかにしている人が多い。これは、日本ではとても考えられないことだ。

他方、ジャン＝リュック・ゴダールは「ムーアが考えているほどブッシュはバカではない。このブッシュ攻撃は敵を利するだけだ」と述べ、ホワイトハウスは「ムーア氏のカンヌ受賞で、米国が思うことを発言できる自由の国と改めて教えてくれた」と述べていることがパンフレットに記載されている。このような形で、公然と自由に作品の価値を論評し合えるのは実にすばらしいことだと思う。そして、こんなホンネ発言を自由に展開できるアメリカの自由が大好き……。

終盤戦を迎えたアメリカ大統領選の行方は？

2004年11月2日のアメリカ大統領選挙まで、あと2カ月弱。ベトナム戦争での従軍歴を誇る民主党のケリー候補に一時劣勢を伝えられていたブッシュ候補は、共和党大会での正式指名を受けて、かなり盛り返してきた。そのため、民主党はクリントン元大統領の選挙参謀たちを、新たにその陣営に加えたことが報道された。

この大統領選挙を契機として、日本でも日米同盟、日米安保条約のあり方やアメリカの東アジア戦略、そして日米貿易をめぐる、アメリカの通商制裁手続であるスーパー301条についての民主・共和両党のスタンスの違いなどが少しずつ真剣に議論され、日本にとってどちらの党、どちらの大統領がベターなのかという議論も少しは盛り上がっている。しかし、2004年7月11日に実施された第20回参議院議員選挙でも、その投票率は56.57%という体たらくの日本では、とりわけ若者の政治や選挙に対する意識は薄く、アメリカの大統領選挙にまでとても興味が回らないというのが実情だろう。しかし、それではダメ。私がいつも主張しているように、選挙での投票権の行使は、国民の最も根本的な権利。その権利を行使しない人は、自ら民主主義を放棄したものとと言われても仕方がない。

そういう意味で、「9.11テロとブッシュ大統領」という重要なテーマをドキュメントで描いたこの『華氏911』という映画は、ぜひ多くの日本人とりわけ若者に観てもらいたいと思うのだが……。

マイケル・ムーア監督とは？

この映画を監督・製作・脚本したマイケル・ムーア監督は、この映画の監督とカンヌ国際映画祭でのパルムドール受賞、そして現実世界における様々な舞台で

のブッシュ大統領との「対決」の中、一躍世界的な著名人となった。したがって、この映画の製作・監督は一種の「売名行為」と批判されていることにも一理ある。

しかし、この映画の中でも再三登場するムーア監督や私の持っている知識で判断する限り、ムーア監督はそういうものを意識したわけではなく、純粋な（単純な？）ブッシュ大統領への怒りがそのエネルギー源となっているようだ。

私が特にそう思ったのは、ムーア監督による下院議員に対するインタビューのシーン。イラクへ派遣されている兵士たちの多くは当然貧しい出身の人たちだ。他方、下院議員の息子でイラクの戦場に赴いているのはわずか1人だけとのこと。そんな情報を得たムーア監督は、自ら下院議員の1人1人に直接面接してインタビューを行い、真にイラク戦争がアメリカのために必要だと思うのなら、「自分の息子をイラクへ派遣させてはどうですか？」と聞いて回った。もちろん誰一人として「そうする」と答えた議員はおらず、嫌な顔をして逃げていくだけ……。

ムーア監督の胸のうちまで私にわかるはずはないが、私としては善意的にこのドキュメンタリー映画の問題提起を受け止めたいと思う。

ブッシュは本当に嘘をついているのか？

マイケル・ムーア監督がこの映画で訴えているのは、要するに「ブッシュは嘘つき！」ということ。私なりに把握しているイラク戦争についての論点は①イラクのフセイン政権による大量破壊兵器の存否、②急に台頭したアメリカのネオコンサーバティブ（ネオコン、新保守派）勢力の狙い、③イラクでの石油利権の狙い、④イラクでの復興利権の狙い等だが、この映画を観てはじめてわかったのは、①大統領に就任してから9.11事件までの8カ月間、ワシントン・ポスト紙によると、42%が休暇だった、②ブッシュとサウド王家とビン・ラディン一族とのビジネス上の特別なつながり等の論点。もちろん、これらの大きな論点については単純に一つの答えが出るわけではないが、この映画を観ることによってムーア監督の視点がはっきりわかったことは、私にとって大きな勉強であり収穫だった。

思い出した「ケネディとアメリカ帝国主義」

権力やマスコミとは恐ろしいもので、ずっと一定の情報をたたき込まれている

と、それを当然のこととってしまうのが人間の性^{サガ}。たとえば戦前、「天皇陛下万歳」と叫んで、「神風特攻隊」として突っこんでいった若者たちは、あの当時の世界から見れば異様であり、ある意味では、現在のイスラム過激派による「自爆テロ」と共通する面があるかもしれない。

アメリカでは、今でもケネディ大統領が歴代大統領の中で人気トップ、少なくともベスト3には入っていると思う。そして多くの日本人も、ケネディは「平和の使者」のようなイメージを持っているはず。しかし私は学生時代、「ケネディとアメリカ帝国主義」という当時の日本共産党の文献を一生懸命勉強したことがある。東西冷戦下で1961年に彗星の如く登場したジョン・F・ケネディ大統領は、別の見方によれば、キューバ危機やベトナム戦争の開始の中、大いなるアメリカの野望＝アメリカ帝国主義を推進した人物とも言える。マスコミによって作り上げられた1つの偶像を盲信してはダメ。すべての問題について、自分の頭で考え、自分の目で見ていくことが大切だ。「9.11テロとブッシュ大統領」そして「ブッシュ大統領とイラク戦争」という大きなテーマを考えている中、ついこんな、昔勉強したことを思い出してしまったが……。

日本でもこんな映画を期待！

2004年9月7日の今、日本では郵政民営化に向けた最終的な政府 VS. 自民党の取りまとめ作業と内閣改造人事問題が渾然一体となっているため、「政治家」のナマの姿が否応なくよく見えている状態。かつて日本でも、昭和30年代末期の高度経済成長期を背景に、九頭竜川ダム建設をめぐる政財界の汚職問題を描いた山本薩夫監督の『金環蝕』（75年）等、政治ネタ（テーマ）の大作映画があったが、この『華氏911』のように生々しく現実の政治上の大問題を描いた映画はあまり存在しない。日本は今、二大政党制への移行がほぼ固まり、自民党から民主党への政権交代も近い将来の現実問題となっているが、これはまちがいに「自民党をぶっこわす」と宣言した小泉改革の思いがけない（？）成果。2005年は戦後60年という節目の年となり、日本国のターニングポイントになるかもしれない年。そんな年に向けて日本でも、この『華氏911』のような映画をつくってほしいと期待しているのだが……。

2004(平成16)年9月7日記